

大学教育だより



RDHE 2009.3 No.6

Center for Research and
Development of Higher Education

大阪市立大学
大学教育研究センター

〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138
(全学共通教育棟5階)

<http://www.rdhe.osaka-cu.ac.jp/>

大学教育だより No.6

Voice～学生の声

都市系分野を学ぶ4人の学生・院生 座談会!

Campus Inquiry

ウチの学部・研究科ではこんな教育を行っています!

医学部医学科 医学研究科 / 医学部看護学科 看護学研究科 / 創造都市研究科

OCU Education News

市大教育ニュース!

短期語学研修と English Café のお知らせ

Center Now & Human

大学教育研究センターの活動・研究紹介

アン ロゾ (Un roseau) No.10 : 縦書き部分

● 渡邊 席子 先生 (大学教育研究センター)

Voice
～学生の声

都市系分野を学ぶ 4人の学生・院生 座談会!

テーマ: 都市をテーマに学部の交流を語る

経済学部、文学研究科、工学研究科、生活科学研究科の学生4名が、それぞれの分野の視点にたって、「都市」というテーマについての教育と研究に関する座談会に集まってくれました。活発な意見交換が行われ「都市型総合大学」を掲げる本学の魅力を確認し、異分野間の交流の意義とそのためのディスカッションの重要さという課題が確認されました。司会は工学研究科佐久間先生が担当され、工学研究科の嘉名先生および大学教育研究センターの専任教員2名(飯吉・西垣)も同席しました。



【研究内容と関心を持ったきっかけ】

今取り組んでらっしゃることと、そのきっかけを教えてください。

- ・工学研究科生(以下工): 工学研究科の前期博士課程1年生です。卒業論文は密集市街地という木造住

宅が密集し火災が起きたら危険な地域で、地震を想定して、どういう整備をしたら被害が少なくなるかという研究をしていました。

演習で取り組んだグループワークで、みんなで話し合っって計画していくことに興味が出てきたの

都市系分野を学ぶ 4人の学生・院生 座談会!

で、都市計画の研究室を選びました。卒業論文で対象にした密集市街地は、僕がずっと住んでいたニュータウンとは、建物も道路も緑も、全く反対だったので興味を持ったのがきっかけです。

・**経済学部生(以下経)**: 経済学部4年生です。来年からは経済学研究科に進学します。中心市街地の活性化に対して交通が担う役割を見ていきたいと思っています。

交通は小さい頃から好きでした。小学校の頃に「A列車で行こう」というゲームがありまして、あれでもうかなり、まちに興味が変わりました。やはり小学校の頃、イトーヨーカドーというお店があって、毎週のようにいってました。他にどんなところにお店があるのだろうと、小売業に関心が広がっていったことがきっかけで、経済をやってみようと思いました。大学一年生の後期に、今お世話になっている松澤先生の授業をたまたまとして、交通経済という分野をはじめて知り、興味を持ちました。

・**文学研究科生(以下文)**: 文学研究科地理学教室後期博士課程2年生です。商業集積地の一步裏に入った若者が集まる街でみられる消費文化と都市空間の関わりを考えています。地理学教室の在籍と同時に、G-COE⁽¹⁾のリサーチアシスタントをしています。地元のまちづくりの会に参加したり、阿倍野プラザの準備をしています。

学部するとき、水内先生の「フィールドワーク」という授業があって、外に歩きに行くのが面白くて、地理学に興味を持ちました。ストリートファッションを研究対象にしたのは、鳥取から大阪にきて若者の集まる街がたくさんあることに驚いたのと、学部時代によく買い物をしていたので、そのなかで考えたことが研究につながるんじゃないかなあと思いました。先輩や先生に、「それ面白いんじゃない」との一言をもらったことが、マスターで研究するきっかけでした。

(1) 世界最高水準の卓越した教育研究拠点形成と大学院教育の抜本的強化を目的として、文部科学省により行われる事業。本学では、都市研究プラザを拠点とした「文化創造と社会的包摂に向けた都市の再構築」プログラムが採択されている。

・**生活科学研究科生(以下生)**: 生活科学研究科後期博士課程3年に在籍しています。大阪市の救急活動、救急出動記録をもとに、地域の日常生活の危険性がどういった地域特性から影響を受けているのか、地震などの災害にどのように関係しているのかを見ています。マスターのときから現在まで、行政と地域防災のWSに参加して、どういう課題があるのか住民の方と一緒に考えています。



私は生活科学部にはいって本当によかったなあと感じています。教職の授業での学部を超えたいろんな分野の人との白熱したディスカッション、教育現場での体験、作業所の方との体験、いろんな人と実際直接会って話して体感できたのが、自分にとって財産だなあと感じていま

す。マスターに進むつもりはなかったのですが、先生が熱意を持って語られる姿が、すごい純粋に楽しく思えてきたのが、決め手になりました。ゼミでも上からの目線ではなくて、一対一の対等の目線でいつも接して下さること、指導して下さることが、本当にありがたいと感じています。また、現場に行くことが多く、教えてもらったことをふまえて体験すると、理解も深まっていったんです。人数も少なく、先生との距離も近い。研究室にもよく行っていましたし、質問もしやすかったです。

・**工**: うちの大学自体、学生の人数が少ないみたいです。**全学的に他大学に比して教員数対学生数の比率は恵まれており、アンケートを行うと本学の学生満足度が高いと言われるのは、そこが大きいのかもかもしれませんね。**

【面白かった授業】

どんな授業が面白かったですか？

・**生**: とにかくディスカッションさせるという授業がありました。ここまでさせるのかと。本当にその日は元気じゃない



とグループに負けるなあというぐらいの授業があり、それは鮮明に覚えているんです。とにかく自分の考えを述べなさい、この問題をどう考える？というように、自分の考えを自分の言葉で表現することを求められて、それがすごく難しいなと感じました。海外に学会で行ったときも、向こうの人は常に自分の考えを話してくる、これは負けていられないなと感じました。ディスカッションを学部の時からやっていくというのはすごく大事なことだなあと思いました。

何年生の授業でしたか？

・**生**: 学部2、3年生を対象にしたものです。家族関係学という要田先生の授業です。でも、覚えてるんですね、何が問題だったのかというのを今でも。2人、もしくは前後左右4人のグループでやりとりをします。授業は、全部で7、8人ぐらいですね。いろんな学部の人が出たので、立場の違いをどう折り合いをつけて一つの意見としてまとめるのかというのが、すごく印象に残っています。

・**文**: 最近、昭和17年の航空写真、昭和27年の地形図、どんどん昔からさかのぼって、20年前の住宅地図までを持って街歩きをして、都市がどう変わってきたのかという系譜をたどる機会がありました。ここは一段低くなっているけれども何だったんだろうというのを、調べてみたら、川だったりとかするんです。都市の変化とその理由を、自分で考えるきっかけになりましたし、そういう授業がほしかったなあと思っています。

・**経**: 総合科目Aの「大阪の地理」など大阪と名前がつく都市

問題を扱う授業がこの大学特有なのかな、と。僕もいくつか授業には出ましたが面白いなあと思いました。水内先生の都市問題を扱った授業があって、フィールドワークによって、都市の中にもこういう問題があるんだと感じる良い機会でした。

- ・**工**：面白かったのが「都市建築史」という大学院の授業で、平城京の跡を見に行き、今でも残っているものを発見してレポートするという課題でした。朱雀大路が80mぐらいあるんですが、畑なんかを探すとそのときのラインがわずかに残っていました。自分で現地を見に行き、現在に残る歴史を体感するというのは面白かったです。あと、設計演習が一番印象に残っています。4年生、修士1年、環境都市工学科、建築学科と学科も学年も違うグループでやる授業なんです。めちゃめちゃ忙しいんですけど、ずっと議論をして何度も現地調査に行くので、普通の授業では曖昧にしか残りませんが、演習ははっきり印象に残っています。

【ディスカッションの必要】

- ・**工**：このまえ「大阪学生まちづくりフィールドワーク」というものに参加しました。大阪の学生を集めてまちづくりを考えるものなんですが、僕のチームにいた子はみんな大学2年生だったんで、ディスカッションがまったくでき



ませんでした。工学部とはまた違った文学部や商学部の視点を伝えてくれたんじゃないかと思います。

- ・**文**：教室で演習をやっているときに、論文の発表後に「何か質問ないですか？」と聞いて、なければいいで、あとは先生がコメントというようになってしまっています。慣れてないというのもあると思いますし、議論することとか、一つのことを調べて意見を発表する面白さみたいなものに気づいていないことが多いのかなと感じています。
教員側も忍耐力を持って待っていなければいけないところがありますね。ディスカッションの授業で、いきなり話し合おうとするとシーンとなってしまう傾向があるように思います。どうすればディスカッションできるようになると思いますか？
- ・**生**：考えていることは常にあるんで、それを自分の言葉で本当に語ることに慣れていないと、どんなところでも勝負できない気がします。いつもゼミで、先生から「どう思う？」といわれて、最初は「勘弁してください」って思っていたのですが、いつも反省するんですよね、「なんでいわれへんかったんやろう」って。その反省のなかで、ちょっとずつ発言する中でぱっと開けるので、積み重ねというか、先生からの投げかけも大事かなあと思います。
何でディスカッションしなければいけないのか分からなかったりするのかもしれないね。それに、1つの授業でどうこうじゃないんでしょね。
- ・**文**：卒論って大学4年間の集大成だと思うのですけれども、普段面白いことをしゃべっている子でも、卒論になると

とたんに、違和感のあるものになったりします。普段考えていることと卒論が一本つなげていたらやりがいもあるし、4年間の集大成になるんじゃないかなあと思います。その辺にどうやって気づくのかだと思います。

- ・**生**：どうしてディスカッションなのかと思ったんですけど、大学で留学生と交流したいなあという思いがあったんですね。文系の学部は留学生をよく見かけるんですが、もっと交流したいなあと思います。



【学部間の交流】

- ・**経**：お互いの学部同士が語り合うような場面ができたと思います。僕は経済だけでなく工学とか、地理学とか商学とかいろいろ面から見ていきたいので、こういう機会がもっとあれば自分の視野ももっと広がるかなあと思いました。
- ・**文**：いろんな学部の人たちが、ふれあう中で自分のやっていることの強みをわかって、もっと勉強しようと思えます。
- ・**生**：相手が鏡になって、このままではいけない、もっと勉強しなきゃと、刺激を受けるので、交流って大事だなあと思ってます。
- ・**工**：いろんな学部の人々が都市について考えているということは、一緒に授業もやっていいのかなと思います。大学院ぐらいになってくると普通の授業は毎回同じメンバーで少人数なので、他分野の人とディスカッション形式の授業があれば、新鮮な意見とか新しい考え方ももらえるのかなあ。大学院ではそういう授業もあっていいのかなあと思いました。

今日はありがとうございました。

【参加教員コメント】

都市という同じテーマについて様々な重なりがありつつも多方向に広がりあって、さすが総合大学だなあと思いつながらお話を伺いました。都市研究とは、本当に学際的で、境界があるようでないようで、興味の矢印の方向がちょっと違う広がりなのだと実感させていただいたように思います。総合大学の良さを活かした教育が工夫出来ると良いと改めて思いました。(大学教育研究センター 飯吉)
楽しかったです。みなさんが学部、研究科に戻ったときに、都市を扱っている研究領域は学部、研究科全体中の一分野ですね。都市だけで集まると非常に親和性の強い、お互い刺激を受けあえる環境になると思います。市大では都市研究プラザ⁽ⁱⁱ⁾がそういう場所だと思います。学生さんのニーズを考えると、今後は学部間、学科間で単位互換の科目提供や共同での授業など連携を深めて行く余地があると思いました。(工学研究科 嘉名)

(ii) 2006年4月に誕生した「都市」というテーマで教員やスタッフが出会い集まる広場をイメージした、都市再生へのチャレンジを目的とした本学の研究施設。

文責：大学教育研究センター 飯吉 弘子
工学研究科 佐久間 康富

新しい医療研修のあり方『スキルスシミュレーションセンター(SSC)』

医療スキル・手技研修の重要性

医師をはじめとする医療の場に携わる人々には、プロフェッショナルな医療人であるという自覚のもと、生涯にわたる自己研鑽が必要です。医師や看護師になろうとする学生や臨床研修医は、生きた知識を学ぶだけでなく、実際に用いることのできる技術(スキル)を習得しなければなりません。また技術を学ぶ際には、自らがよりよい医療を実践するという緊張感を伴う実践的な訓練が必要となります。とくに手技を要する医療行為には何らかのリスクをとまなうこともあり、手技を医療の場で行う前に十分なシミュレーション研修を受けることが重要です。

スキルスシミュレーションセンター(SSC)の紹介

ここでは本学医学部が取り組んでいる『スキルスシミュレーションセンター(SSC)』についてご紹介します。医学部は、医学生・看護学生の卒前教育や、臨床研修医・新人看護師をはじめとする病院職員の卒後教育における医療手技のシミュレーション教育を提供する施設(スキルスシミュレーションセンターSSC)を創設し、2007年3月から運用を開始しました。センターには開設当初より専任管理者を置き、多くの協力者のお蔭もあり、運用初年度の総利用者数も7000名を越えました。2年目はさらに利用者が増加しており、早くも全国でも有数のセンターに育っています。定期講習会には毎回多くの受講者が集まります。

若手医師・医学生にとってのTeaching is learning効果

医学生が静脈採血などの臨床技能の初歩を学ぶ講義や実習などが数多く行われており、卒後数年の若手医師がインストラクターを務めています。教えることにより自ら学ぶ(Teaching is learning)という効果を期待するからです。

医学部学生にも同様の機会があります。医学生インストラクターの主催で病院職員対象に自動体外式除細動器(AED)講習会を開催しています。この講習会はSSCの目玉となっており、大変好評です。AED講習会は病院の安全対策に寄与するだけでなく、病院内の異



なる職種間にある垣根を取り除くという副次的な効果もあるとの声も聞こえてきます。昨年秋には高円宮妃殿下も見学にお越しになり、参加者も大変感激いたしました。



学部外に広がる利用と業種の垣根を越える啓発効果

開設2年目の昨年度は学部外にも利用者を拡大しています。オープンキャンパスでの医学部入学希望高校生や、近鉄文



化サロンとの共催講座での一般の方々を対象に、SSCを開放した医療体験講習会を開催しました。こちらもたいへん好評でした。また本学生活科学部の管理栄養学科学生にも、開設当初からSSC医療体験ツアーを行っており、将来管理栄養士を志す彼らにも大変好評で、今後も継続していきたいと考えています。

このようにSSCには、授業では得られない

自発的な学びという教育効果だけでなく、異なる職種間にある垣根を越える啓発効果もあり、さらには大学の取り組みを学外の方々に知っていただくという宣伝効果もあるといえましょう。

医学部では、研修内容を充実かつオープンなものとし、みなさまの益々のご利用をお待ちしています。具体的な研修内容についてはSSCのホームページをご覧ください。
<http://www.med.osaka-cu.ac.jp/ssc/>



医学研究科准教授 首藤 太一
大学教育研究センター兼任研究員 医学研究科教授 中嶋 弘一

多様な学生のニーズに応じる 医学部看護学科・看護学研究科の教育改善・FD活動

新しく出来た看護学研究科

私たちの研究科は大阪市立大学の中で一番新しくできたので、まだ馴染みのない方も多くいらっしゃるでしょう。しかも阿倍野キャンパスにあるため、杉本町の本学からは遠く未知の世界に感じられることでしょう。実は、多様な教員と学生が切磋琢磨する、新しい、勢いのある、洗練とした研究科であり、そのことは活発なFD活動(教員団の教育の質向上のための取組)にも表れています。そこで本稿では私たちのFD活動の紹介を通して、皆様にとっては遠い存在である医学部看護学科・看護学研究科の一端をお見せたいと思います。



医学部看護学科の多様な学生とFD

医学部看護学科には多様な学生が入学してきます。1年次から入ってくる学生は、高校を卒業して入学し4年間で看護師・保健師を目指します。2年次編入生は他学部ですでに学士を取った人たちであり、3年次編入生はすでに看護師免許を持った人たちです。すなわち、2年次編入生は看護の専門技術の習得を何より求めている一方で、3年次編入生は大学の教養教育すなわちリベラル・アーツを期待して入学してきます。これだけでも、教員の教育力の多様性が期待されていることがお分かりでしょう。さらに大学院生となると、医療現場で指導的な役割を担う人が入学します。この人たちは概ね、大学院で看護学の研究方法を学ぶことを期待しています。私たちのFD活動は、これら多様なニーズに応じるために、教員の授業内容や教育の工夫を発表し合い、教員組織が丸となって彼らを導いていくのだという思いを共有する場になっています。

看護学科・看護学研究科の第1回FD研修会

今年度第1回のFD研修会では、大学教育研究センターの矢野裕俊先生を講師にお迎えして、『相互研修型のFDを目指して』と題して、全国の大学におけるFDの動向と私たちがとるべき方向性について示していただきました。矢野先生の言葉をお借りすればこの第1回研修会は「トップダウン型」の「啓蒙」的な講習会でしたが、まずはこのお話を聞いて看護学研究科教員が共通認識を持ったところで私たち独自の「相互研修型」の活動に入っていました。

独自の「相互研修」の推進

看護学研究科独自の「相互研修」において今年度は、基礎看護学の城ヶ端初子教授(『私の授業の工夫』)、老年看護学の臼井キミカ教授(『私の講義アイデアあれこれ』)、一般教育(英語)の廣田(筆者)(『看護英語の授業を始めるにあたって』)が講師を務めました。上に述べた学生の多様性によるニーズの違いに対応して、看護の教員はそれぞれ専門分野で長く臨床・教育に携わってこられた経験をふまえて具体的にお話いただきました。一方、私のような一般教育の教員は特に3年次編入生の要望に応じる形で、大学でしか学べない本物の学問に触れる心構えをどのような教材を用い、

どのような工夫を凝らして教授するかについて話しました。

いくら同じ所属であっても教員同士、専門分野が違うとお互いの研究内容や教育内容を知り合う機会はめったにありません。そこで私たちはFD研修の機会にさまざまな分野から講師を出して研修し、それぞれの教員が力を出し合って、多様な学生の学びを支え合っていることを確認しています。『大阪市立大学学生歌』には「英知にさゆる眼もてそびゆる科学の殿堂に吾等究めんその真理」と歌われています。道すじ(専門分野)は違っても真摯な姿勢で「真理」を求めることに変わりはありません。私たちはFD研修会を通じて、学生歌に歌われているところの真理の探究のために教員も学生も切磋琢磨する、大学とはそういう場なのだという思いを新たにしています。

大学教育研究センター兼任研究員
看護学研究科講師 廣田 麻子



社会人院生との「知の創造」

「都市」をコンセプトにした大学院

創造都市研究科は、忙しい社会人が働きながら通える『都市』をキーコンセプトにした新しいタイプの社会人向け大学院を目指して設置されました。2003年4月に開校し、関西都市圏の活性化をめざして、少人数のインタラクティブな教育による高度なプロフェッショナルの養成と問題解決型「知の創造」にとりこんでいます。

「創造都市」という言葉はちょっと見慣れない表現かもしれませんが、都市は、これまで、数多くの文化、芸術、学問、思想、ビジネス、生活スタイルなどを生み出す中心となってきました。それこそが都市の活力であり、発展の基盤でもあったのです。創造都市とは、このような創造機能を十全に発揮する要件を備えた都市のことなのです。

近年、世界の大都市では、こうした機能が働かず、沈滞・衰退する都市も見られるようになってきました。そこで、都市の活性化を担う人材を養成するためにこの理念を掲げた研究機関として世界で初めて創造都市研究科が設立されました。

社会人向け大学院

創造都市研究科は独立大学院ですので、学士課程の学生は在籍していません。修士課程は、都市ビジネス、都市政策、都市情報学の3専攻で構成され、博士(後期)課程では、都市政策、国際地域経済、事業創造、共生社会創造、都市情報環境などの多様な分野から、「創造都市」を中心概念に、既存の枠にとらわれない学際的な研究を重視し、さまざまな専門領域から創造都市構築のためのアプローチの融合をめざしています。

仕事を続けながら勉強・研究したい社会人が主な対象になるため、ほとんどの講義は大阪駅前第2ビル6階の梅田サテライトキャンパスで実施され、平日夜間の2日と土曜日に通学することでゼミ、研究指導などをのぞく必要な講義単位が修得できるようにカリキュラムを構成しています。現在、修士課程・博士(後期)課程合わせて約300名が学んでいます。

このように創造都市研究科は、社会人院生を対象とした大学院ですのでいくつか特徴のある授業構成、指導方法を採用しています。ここでは、その中からいくつかの取り組みを紹介したいと思います。

「ワークショップ」について

最初に紹介させてもらう取り組みは、「ワークショップ」と呼んでいる講義です。何度も紹介させてもらっているとおり、創造都市研究科は社会人院生を対象とした大学院で、

入学する院生は各自の職場で何か解決の手がかりを得たい問題があるとか、将来を見据えて今までとは違う課題に取り組みたい、など目的を持った院生が多く集まります。

そのような院生に対応するために、教員も個別に対応するだけではなく、複数の教員グループで対応するなどして院生が持ち込む課題に対応できるように準備していますが、なかなかすべての最新の課題に対応できていない場合もあります。

そこで、一年間の講義をとおして、各分野で先端の話題をお話いただける講師の方を毎回お呼びして、講演いただくことでさまざまな知識を得る機会を用意しています。さらにお話を聞くだけでは実際の「本音」の部分の掴みにくい部分もありますから、講演後教員も一緒になって積極的に議論する時間も多くとるようにしています。

このワークショップという講義は、修了時に大学院生活での感想を尋ねている修了生アンケートでも好評を得ている科目になっています。各自の問題意識に対応した最新の話題だけでなく、いままで気づかなかった問題、解決の手がかりも得られると言うところが評価されています。

授業評価アンケートと修了生アンケート

院生からの評価という意味では、研究科独自に授業評価アンケートという取り組みも行っています。共通教育でも同様のアンケートがあり実施内容、その利用方法など比較するとまだまだ不十分ですが集計した内容は閲覧可能にしておりますので、受講を考える新入生や講義を提供している教員にとって厳しい社会人院生の意見を参考にできるよい機会となっています。

最後に、修了生アンケートにもう一つよく書かれていることでまとめておきたいと思います。社会人として働きながら貴重な時間を割いて大学院に通った中でよかった事は何かという内容の問いに対して、職場にいるだけでは得られなかった、人と人のつながりが得られた事をあげられる方が多くおられます。

社会人向け大学院として講義内容を充実させることはもちろん、そのようなつながりを大切にしなければいけないと思いますし、このことは社会人大学院に限ったお話ではないと思います。この冊子を読まれている学生の皆さんも大学生活で得られる人間関係を大切にいただければと思います。

大学教育研究センター兼任研究員
創造都市研究科都市情報学専攻
学術情報総合センター准教授 大西 克実

短期語学研修

ビクトリア大学
短期語学研修プログラム

English Language Centre, University
of Victoria (カナダ) で過ごす春休み



本場の英語に触れながら、
あなたの英語力をアップ!

カナダ西海岸、バンクーバー島の南端、安全清潔、風光明媚なビクトリアで「生きた英語」を学びませんか。最高水準の TESL 技術、優秀な講師陣、フレンドリーな学習環境の中で英語を学び、異国の文化に触れながら過ごす貴重なひと時を経験できます。

費用: 40万円(予定)
参加者: 20名程度
(応募者多数の場合は選抜します)
引率者: 教員1~2名

Photo: Tourism Victoria

English Café  Open中!

English Caféには15台のPCが設置されているほか、英語の新聞や雑誌、CD、DVDなどが置かれています。英語を学びたい学生であれば、だれでも自由に利用できます。場所は全学共通教育棟(8号館)5階です。



ネイティブの先生と
楽しくおしゃべりしませんか!

English Caféでは、月曜日、水曜日、木曜日の午後4時30分から1時間、OFFICE HOURを設けています。
この時間にネイティブの先生がみなさんをお待ちしています。
なにを話すのも自由。楽しい時間をお過ごしください。

大阪市大の学生は1年次と2年次にCollege Englishを履修します。
College English (CE)は 1年次はネイティブ・スピーカーの教員が授業を担当(一部例外あり)、 1クラス25名程度の少人数制といった特徴がある英語のクラスです。

興味のある方は
英語教育開発センター
(全学共通教育棟5階)
まで

英語教育開発センター

FD 活動

(1) FD 研究会 (年1回)

FD 研究会は、大阪市立大学における教育の向上を図るための組織的な研修や教育に関する研究活動の成果に関し、全学的な交流をはかる場として設定されています。例年、100名前後が参加する大きな研究会です。2008(平成20)年度の全体のテーマは「大阪市立大学の学生の学びをどのように導くか カリキュラムの見せ方・歩み方」でした。



(2) 教育改革シンポジウム (年1回)

教育改革シンポジウムは、全学的に共有が可能なホットピックについて、大学内外の情勢を鑑みながら考えを深めることを目的に開かれています。第15回目を迎えた2008(平成20)年度は、「大阪市立大学にはどのような学生が入学し、どのように学生生活を送っているのか 各種調査結果から考える」をテーマに開催しました。

(3) FD ワークショップ・大学教育研究セミナー (年2~4回)

FD ワークショップと大学教育研究セミナーは、ワークショップ形式またはラウンドテーブル形式等を取り、主に学内の参加者間で授業デザイン事例など教育実践事例や大学教育にかかわるホットピックの紹介とそれらについての意見交換を行う場として設定されています。

研究成果の発信と広報

(1) 大阪市立大学大学教育研究センター紀要 『大学教育』

主として本学の教育に資する研究成果の発表の場として、学内はもとより全国から投稿を募り、年に1~2回発行する、査読付きの学術雑誌です。センターのFD活動・研究活動の報告の場でもあります。

(2) 大学教育だより & Un roseau(アン ロソ)

教員および学生を対象として、大阪市立大学におけるさまざまな教育への取り組みをまとめた広報誌『大学教育だより』を年1~2回発行してきました。また、大阪市立大学での学びの道しるべとして全学共通教育総合教育科目ガイドブック『アン ロソ』を発行し、学生のみならずに配付してきました。前々回からこれら2冊を合冊として、より充実した内容として発行し、一層幅広く配付することとしました。

研究プロジェクト

センターで現在取り組んでいる研究プロジェクトは大きく、「学士課程教育のあり方」についての研究としてひとくくりにすることができます。

学士課程という言葉は、まだまだ馴染みがないかもしれませんが、学部にも属する段階を指す言葉として定着し始めています。その背景の

1つとして、高等教育のグローバル化・大衆化がすすむ今日、学士という学位にも国際的に共通の質が求められるようになったということが挙げられます。日本でも、1991年の法改正により、学士がたんなる称号から学位の一つになりました。また現在、中央教育審議会大学分科会が、学士学位に相応しい、卒業までに学生が最低限身に付けなければならない能力を「各専攻分野を通じて培う学士力」と呼んで参考指針を提案しています。

こうした動向をふまえて、センターでは本学にふさわしい学士課程教育のあり方を探るために相互に関連し合う次の3つの調査研究を進めています。

(1) 学生の学修を中心とする授業デザイン・カリキュラムのあり方の研究

これまでの大学教育は、授業科目を担当する教員が大学で行われる研究の成果を講義するという、教える側の論理で組み立てられてきました。今や大学進学率は短大を含めると53.7%、大学は同世代の半数以上の人々が学ぶ教育機関となっている現状では、教員がどれだけと内容と内容を教えたかを中心に教育の質を問う発想から、学生が実際に何をどれだけ学んだかということを中心に教育の充実を考える発想への転換が重要だといわれています。卒業時にどのような学修成果(learning outcome)を期待するのが大学教育の重要な検討課題になってきています。それに関連してキャリア・デザイン力や批判的思考力、コミュニケーション力などを含む汎用的能力の育成など、学士課程教育において専攻分野の別なく共通に取り組むべき教育課題が注目されるようになってきています。センターではこれらに共同研究や個人研究のかたちで取り組んでいます。すでに取り組んだ「初年次教育のあり方」に関する研究成果は、全学共通教育のなかの初年次教育として生かされています。

(2) FDのあり方に関する研究

センターでは、FD研究会や、教育改革シンポジウム、授業デザインワークショップにおいて、学生の学びを促すようなカリキュラムや授業のあり方などをテーマに取り上げ、市大にふさわしい学士課程教育について全学の教員の方々とともに考えてきました。

FDとは個別の授業内容・方法の改善向上のための取り組みのみに限定して理解されることが多いようですが、センターでは大学が大学として存立するために、教員に求められる大学の理念の共有、人材養成目標・教育目標への理解に根ざした本学の教育全体の質的向上のための、自主的かつ組織的な営みとしての自己研修・相互研修という大きな観点から、そのあり方を考えています。

また、センターが中心に企画実施している全学的FD活動と、各研究科・学部で行われているFD活動の連携を図り、市大のFDの考え方とそれに基づく活動のあり方を提案していく予定です。

(3) 学生の学びに関する実態調査

2007年、2008年の2カ年にわたり、全学共通教育においてそれぞれで学期末に行ってきた学生による授業アンケート調査を学期の中間に実施し、結果をその後の授業に生かせるような試行を進めました。学生の学びを中心に据えたカリキュラムや教育方法を今後考えていくためには、授業の評価とは異なるカリキュラムの評価に踏み込んだ調査が必要であり、学生の皆さんに対する聞き取り調査や学びに関するアンケート調査を現在計画しています。

大学教育研究センターの研究

大阪市立大学 大学教育研究センターは、大学を取り巻く新しい環境の中で、社会の進路を見据えた大学教育のあり方を実現することを目指して研究と開発をすすめるために設立されました。

下記の3本の柱を基本に据えつつ、相互に強く関連をもつ各種プロジェクトに取り組んでいます。

高等教育の制度や その役割についての研究

- (1) 学士課程教育システムのあり方
- (2) 学生相談・学習相談システムのあり方
- (3) 社会における大学のあり方
- (4) 生涯学習社会における大学のあり方

全学的FD活動 各種研究プロジェクト

カリキュラム・教育方法の 開発に関する研究

- (1) 学士課程のカリキュラムおよび教育方法の開発
- (2) 初年次教育カリキュラムのあり方
- (3) 授業改善支援システムのあり方

大学教育の 評価および教員評価の あり方に関する研究

- (1) 大学教育評価のあり方
- (2) 大学教員評価のあり方
- (3) FD活動のあり方



ファカルティ・ディベロップメント(Faculty Development)の略で、大学教員団の職業的な資質向上のための活動のことです。主として教授能力の開発をさす言葉として使われていますが、大学教員の職務には、教育だけでなく、研究や組織のマネジメントもあるので、FDとは広くそれらにかかわる能力開発ということになります。教授個人の教授力の向上だけでなく、大学組織全体の教育力や教育の質の向上のために行う組織的な取り組みの総称です。

大学教育研究センタースタッフの紹介 (平成21(2009)年3月現在)

所長

中村 圭爾 副学長



専任研究員

矢野 裕俊 副所長 大学教育研究センター教授
研究分野：生涯学習社会における学校教育の役割/学校カリキュラム

大久保 敦 大学教育研究センター准教授
研究分野：高校大学の接続/自然史科学教育/古植物学

西垣 順子 大学教育研究センター准教授
研究分野：大学教育の評価に関する研究/教育心理学

飯吉 弘子 大学教育研究センター准教授
研究分野：社会における大学のあり方に関する研究/教育学/大学教育史

渡邊 席子 大学教育研究センター准教授
研究分野：教育支援システムの開発/キャリア教育/社会心理学

兼任研究員

青山 和司 経営学研究科教授
坂上 学 経営学研究科准教授
中川 満 経済学研究科准教授
小柿 徳武 法学研究科准教授
早瀬 晋三 文学研究科教授
松浦 恆雄 文学研究科教授
辻本 英夫 文学研究科准教授
坪田 誠 理学研究科教授

八ッ橋 知幸 理学研究科准教授
日野 泰雄 工学研究科教授
長崎 健 工学研究科教授
中嶋 弘一 医学研究科教授
廣田 麻子 看護学研究科講師
岡田 進一 生活科学研究科准教授
大西 克実 創造都市研究科准教授
国田 賢治 都市健康・スポーツ研究センター准教授

事務局(兼任)

染川 章文 学生支援課長
服部 崇司 学生支援課員